

〈助けたつもりが、助けられ〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

空前の猫ブームとか。日本でも猫の名物駅長とかタバコ屋の看板娘ならぬ人気猫などの話題を時々テレビで見ることがある。本作は、イギリスの猫と心優しいホームレスの青年とのほのぼのとした愛の物語。世界三十数か国語に翻訳され一千万部のベストセラーになつた実話の映画化である。

ロンドン中心部の繁華街コヴェント・ガーデンでストリート・ミュージシャンとして生きるジェームズ。その日の食べ物にも事欠く日もあれば、音がうるさいと場所を追い払われるときもある。夜はギターを抱えてビル陰の路上で寝るといふ厳しい生活である。ドラッグの更生プログラム中だが、仲間には誘われてつい、ヘロインに手を出して救急車で運ばれる。駆けつけたNPOの更生担当者ヴァルは「今度やつたら命の保証はないのよ」とコワイ顔で念を押す。上から目線の嫌味な女に

見えるが、実は心の支えが何もないジェームズを何とか救いたがためなのだ。早速、当局と掛け合い、彼のために住居を確保する。

新居への引っ越しの日、知らぬ間に一匹の茶トラ猫が部屋に迷い込んで来る。ジェームズは猫を抱いて近所中を飼い主を探し回るが見つからない。翌日、ジェームズは街でぼったり父親に出会う。クリスマスに帰りたいと言うジェームズを、そばから父の再婚相手(義母)がびしやりと断る。ふがいない父はこつそり息子に小遣いを手渡し。ジェームズは両親の離婚後、母親について豪州に渡るが、母の再婚相手とうまくいかず、学校でいじめにも遭い、ミュージシャンを目指し一人で帰国する。だが、父親の家にも居づらく路上生活者に…という事情が次第に明らかになってくる。

帰宅すると、茶トラ猫が怪我をして

家の前でうずくまっていた。ジェームズは猫を動物病院に連れて行き、薬代に父親からもらったなげなしの金を全部使ってしまう。ボブという名のその猫は、それ以来いつもジェームズの「仕事場」について来て、演奏中はじつと傍で聞いている。移動はジェームズの背中や肩に乗って行く。ボブがいるだけで周りには多くの人の輪ができる。ボブを守ることで、ジェームズに自覚が生まれ、今度こそ本気で「最悪の風邪を一〇〇倍悪くしたような」禁断症状に耐え、一週間後ようやく薬を抜くことに成功する。気分も晴れ晴れと父を訪ね、「見捨てられたこと恨んでないよ」と語り掛けると、父親はポケットから小さい頃のジェームズの写真を取り出し、「お前を見捨てたことなんてないよ」と。

繊細で気弱で自信のなかった青年が、現実逃避をやめ、自己と向き合う勇氣を得て前へ一歩踏み出す。ボブという名の猫のおかげだ。ボブ役には本物のボブが出演し、お得意のハイタッチをするなど名演技。野良猫を助けたつもりが助けられた青年の話が、これほど心に響くのは、信じ合う相手をもつ幸せを思い出させてくれるからだろう。近隣の個性豊かな人々の温かさも忘れ難い。おすすめの本。

『ボブという名の猫 幸せのハイタッチ』

イギリス映画(103分)

監督：ロジャー・スポティスウッド

出演：ルーク・トレダウェイ、ジョアンヌ・フロガット
ほか

8月26日(土) 新宿ピカデリーほか全国順次ロードショー

© 2016 STREET CAT FILM DISTRIBUTION LIMITED ALL RIGHTS RESERVED.

